

インドにおける中国茶・アッサム自生茶の 移植・栽培の相克についての考察

野間晴雄
グルン・ロシヤン

1. はじめに——中国茶の優勢状況からみえてくるもの——

今日、茶／チャは世界で最も広く飲まれている共通の飲料のひとつである。本稿の目的は、そのチャが、“二次的栽培中心”といえるインドでいかに定着したかを、日英の二次的文献やインドでの茶栽培者による一次資料をもとに考察することである。

これまでの研究で、チャのその起源地と目されてきたのは、中国西南部の雲南省と貴州省にまたがる雲貴高原¹⁾からタイ北部、ミャンマー北部、さらにインドアッサム州のブラマプトラ川上流一帯である²⁾。このようにはなはだ広い、換言すれば、あいまい模糊としたチャの〈初期中心〉から推察できる含意は何か。われわれは次の2点に注目した。

まず第一に、中国で発達したチャは分類学上はすべて亜熱帯性のツバキ科ツバキ属 (Camellia) に分類される常緑樹であるという事実である。しかしその形態や形状は、土壌、標高、湿度、日照、降雨、緯度などの違いによって、一見すると同じ属の植物とは思えないぐらい多様性に富む。数十センチの低木から14m近い高木まで存在するが、葉が肉厚で濃い緑色をしていることは共通する。この多様性が長く、茶の植物学的同定を困難にしてきた。

第二に、そのチャの〈初期中心〉の広大さにもかかわらず、一般に流布される茶の言説は中国が圧倒的な情報量と取り扱い量、生産量からも、また加工・

利用の多様性からも、18世紀まで他の地域を圧倒してきたことである。その常態が変化する場がイギリスが侵略の触手を伸ばしてきたインドである。

中国での茶利用の略史を素描してみると以下になるであろう。まず、真偽は定かでない伝説の範疇に属する茶の利用の開始は古代の三皇の1人とされる神農に始まる。ある日、神農が木の下で湯を沸かしている時、微風が吹いた。その風で飛ばされてきた茶葉が沸騰している湯に入った。神農はその茶を飲んだ後、美味ささと元気を感じたという³⁾神農は農業の神であるとともに、あらゆる葉・果実や根を食べて薬草研究を行ったとされ、薬種商の神でもある。つまり茶が薬用から始原したことの根拠として、必ず引き合いに出される伝説上の人物が神農である⁴⁾。

亜熱帯性であるチャは、分布からみて中国の政治文化の核心地帯からは離れている。そのため、支配者や上層階級が茶を利用するには、運搬という所作が不可欠であった。5世紀頃まで茶はもっぱら薬用として珍重されたことは、その効能とともに、希少性にもよる。

しかし空前の大帝国となった唐代には、その茶が仏僧を介してはるか遠い地の支配者層に伝播していく。それが日本とチベットである。前者は茶の種子であり、後者は茶を運搬しやすい固形に加工した形態（磚茶）である。この過程で、日本や中国では茶器が発達し、使用する水に関しても吟味されていった。

いずれにせよ、茶は起源地から離れたところで季節を問わずに利用するのであるから、生茶、生葉のままではない。ここで、茶を飲用できるように加工する方法（製茶法）と、それをいかに飲むか（飲用法）が明確に区別して意識されてきたのではないだろうか。文筆家の陸羽（733～804）の『茶経』が伝える唐代の製茶法は、摘んだ茶葉を蒸したあと搗いて粉碎し、それを型に入れて乾燥させるものである。製品は円盤状の固形茶＝餅茶であり、円盤状の中心には穴があいていた。ここに紐を通して束ねて保存運搬したという。一方、その飲用法は、上述の餅茶を火にかざして焙って、そのち薬研で挽いて粉状にする。それを篩^{ふるい}にかけたのち、沸かし煮出して泡立てたのを飲用する⁵⁾。他の材料と混ぜて飲まれることもあった⁶⁾。

インドにおける中国茶・アッサム自生茶の移植・栽培の相克についての考察（野間・ロシャン）

宋代にはより広範囲にかつ一般庶民層まで中国では茶が飲用されるようになった。それは再生産を可能とする茶産地が中国各地に生れていたことを意味する。自然条件から、従来の茶産地は山地・丘陵地が多い江西省などの長江流域であった。ただし、唐代にすでに一部建設された中国の南北を結ぶ大運河によって、〈初期の中心地〉、すなわち湿潤温暖な中国から、遠く離れた長安など北の乾燥した中国にもたらされた点からも、茶は遠距離交易品という性格を有している。つまり、茶は時の政府・支配者がその生産・流通までを押さえるいわば“国産品”であり、重要な遠距離交易品であった。ただし、生産自体を担うのは、零細小規模な家族を主体とした農民であり、この形態はその後も中国の茶生産を現在まで規定することになる。

茶の発音には大きく2系統あるのはよく知られている。広東方言の cha と閩南語といわれる福建省南部（廈門）方言の te または tei である。前者がいわゆる「大航海時代」以前に主として陸路で伝播したルートと言われる。チベット、インド、中央アジア、ロシア、西南アジアなどがそれにあたり、朝鮮、日本、ベトナムもこの系統である。それに対して、後者は17世紀の初めに廈門商人から茶を入手したオランダ人に遡る。南シナ海を経由して海路で北ヨーロッパへ運ばれた。そのためヨーロッパ諸国の多くの発音は te 系統であり、スリランカ、インドネシアもこの範疇に入る。

中国との接触がいちばん早かったヨーロッパの国は広東省の珠江エスチュアリーの端にあるマカオ（澳門）を拠点としたポルトガルである。茶は1516年に、ポルトガル人によってヨーロッパに持ち込まれている。ポルトガル人は中国政府から許可をもらい、ヨーロッパ中で商人の先駆者として中国国内で活動していた⁷⁾。この国の茶の発音のみが例外的に chá であるが、ポルトガル人はオランダのように茶をヨーロッパに転売することが少なかったため、この用語はヨーロッパ各地には広がらなかった。

これは茶がヨーロッパの文献に登場する同じ時期と重なる。1545年頃にはイタリア人のラムージオが茶について『航海記集成』で紹介している⁸⁾。なお、角山栄は、16世紀になってアフリカ南端迂回による海路が開かれるまでにも、

いわゆるシルク・ロードのユーラシア大陸内陸ルートによっても茶がはかり早くからヨーロッパに知られていたと考えてもおかしくない述べている⁹⁾。出口は、ヴェニス商人の家に生まれた探検家マルコ・ポーロはシルク・ロードを通して、13世紀に元の夏の都である上都（内モンゴルのドロン・ノール）についた。世祖フビライに17年間仕え、各地を旅して故郷のヴェニスに帰ったが、かれは茶に関する記録を一切残していない¹⁰⁾。

ポルトガルに遅れて中国沿岸部をめざしたオランダは、福建省のアモイ（廈門）を拠点としヨーロッパ諸国へ茶の輸出を試みる。1610年、オランダ船は中国と日本で集めた茶を初めてヨーロッパにもたらした¹¹⁾。

このオランダの後塵を拝したのがイギリスである。しかし、イギリスは短期間で茶の中国との貿易で主導権をとる。16世紀のイギリスは茶の世界一の茶消費国になったが、茶の輸入量が多過ぎたため、1770年代後半から、国家財政が赤字になる状態までおよんだ。その結果、茶の輸入代金の支払いに悩まされ、インドでのアヘンや茶栽培に注目するようになった。

なおヨーロッパでは最初は緑茶が飲まれていたが、しだいに紅茶に代わっていった。特に、イギリスの場合は、紅茶が非常に好まれ、輸入の大部分は紅茶であった¹²⁾ことは付言しておきたい。

2. インド茶業におけるアッサムの意義

19世紀の半ばから中国以外での茶生産が活発化する。その先陣をきったのがインドである。1830年代からインドではチャの〈初期中心〉に比較的近い地で茶の栽培が開始された。それが当時のインドへのイギリスの関与が薄かった東北部のアッサム地方である。人類学・民族学・言語学などの研究結果によると、現在アッサム地方に居住するインド・アーリア語族系民族、ドライヴィダ語族系民族、チベット・ビルマ語族系民族とオーストロ・アジア語族系民族の4語族系諸民族は、いずれも紀元前1000年紀の前半までアッサム河谷や周辺山地に移住していたといわれる¹³⁾。

アッサムがはじめて歴史記録に登場するのは、アホム王国（1228～1826）が

インドにおける中国茶・アッサム自生茶の移植・栽培の相克についての考察（野間・ロシャン）

成立して書かれた『ブランジ（Buranji）』で、13世紀初頭である。この民族は中国雲南省とミャンマー国境付近に住んでいたが、後継争いに端を発して、13世紀前半にアッサム州東部に定住し王国を築いた。以後600年間アッサム州の大部分を支配した¹⁴⁾。また、後述するジュンポー族の存在からも、アッサムの文献上の歴史は少なくとも12世紀までさかのぼる。その後は、16世紀以降になると、イギリス人の軍人、探検家、行政官、宣教師など多くの記録にアッサムが言及されるようになった。

アッサムはインド植民地支配の東の拠点となったベンガル地方に隣接しており、ブラマプトラ川の中流域の氾濫原がその生活舞台の中心となる。モンスーンの影響を受けて、世界でも最多雨地であり森林多い湿潤で不健康な熱帯というステレオタイプ的なフロンティアでもあった。ここはもともと先住民の名前をとってアソム（Asom）と言われていた。その後、イギリス人によってアッサム（Assam）と名付けられる。それが、インド最大の茶生産地となり、「茶の帝国」（Empire of Tea）と呼ばれるまで発展し、現在にいたる。

インドでの茶栽培の始まりをまず見ていきたい。1825年、スコットランド出身で、元ベンガル砲兵隊少佐のロバート・ブルース（Robert Bruce）はアッサム北東部の丘陵地帯で自生の茶樹を発見している。そのころ、アッサム地方では多数のイギリス人学者たちが茶栽培の研究を行っていた。1836年には、アッサムで最初の中国から移植した実験茶園がサディア（Sadiya）に設置され、茶栽培実験が行われた（次頁図1参照）。残念ながらこの最初の実験茶園の苗はほぼ枯死してしまい、開発は失敗に帰した。生き残った茶樹のうちの幾本かが、当時軍の司令部が置かれていたジャイプール（Jaipur）に移植された¹⁵⁾。

これを機にイギリス人は中国茶の種子・苗での茶栽培を開始する。しかしながら、アッサムにおける中国茶の移植は自然条件も異なることもあって、不成功に終わる。莫大な金額と長い時間が費やしながら、結局、イギリスは中国茶の栽培を断念し、アッサム自生茶を育成するようになった。その後、アッサム自生茶の栽培が続行され、インドにおける茶栽培が発展へ向かう。

1850年代からインドにおける茶栽培に大きな転機が訪れる。インド人も茶生

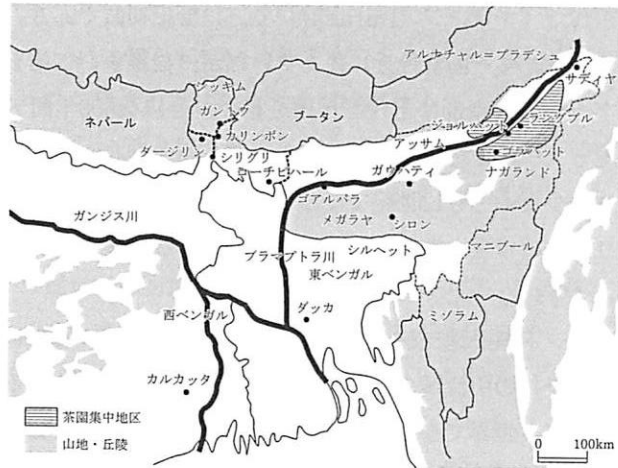


図1 アッサム概要図と主要茶産地

産に参加するようになり、民間の茶園も徐々に設立され始めた。1856年には、アッサムの西方に位置する高地ダージリン（Darjeeling）と、その南にひろがる未開の平地との境界であるドーアル（Dooar）まで茶の栽培が拡大された。1836年に茶の栽培が始まったインドは、約1世紀後、世界第一の茶生産国になった。

しかし、なぜ、実際はイギリス人らは茶栽培に注目するようになったのだろうか。イギリス人がアッサム地方で茶を栽培する際、どのように中国茶を入手し、移植・栽培したのについては、これまで詳しい経過は論じられて来なかった。また、イギリス人が中国茶の苗木や種子を入手するために懸命に努力し、莫大な金額を費やした中国茶に代わって、長い間茶として認められなかったアッサム地方の自生茶をなぜ栽培するように決断したのかという点も謎に包まれてままだ。またなぜ、イギリス本国では他の茶より紅茶が好まれるようになったのか。さらに、初期の緑茶はどのようにして紅茶に転換したのかなどもこれまで十分には考察されて来なかった。

本研究では、アッサムにおいて茶を栽培した際、イギリス人が中国茶を入手した方法、および、茶の移植・栽培方法やその茶園の拡大を検討し、どうして

インドにおける中国茶・アッサム自生茶の移植・栽培の相克についての考察（野間・ロシャン）

イギリス人はアッサム地方の自生茶の栽培に至ったのかの理由をも明らかにしていきたい。その際には、イギリスで紅茶が好まれる理由についてのさまざまな言説を解釈しながら、緑茶がどのようにして紅茶に転換したのかという（転換）の理由・契機にも注目する。

その推定方法として、当時イギリス東インド会社所属の職員たちによって残された記録や、書物を参考にした。さらに、イギリス東インド会社が茶を導入した際、中心的な役割を果たした人物の一人であるグリフィス（P.Griffiths）によって作成された、貴重な記録をはじめ、英語の二次文献や統計などを用いてから分析し・考察することにした。

3. アッサムにおけチャの存在と茶樹の発見

アッサムでチャが自生することが知られたのは、つい最近の19世紀初頭である。アッサムで、初めてイギリス人に発見された茶樹は大葉種¹⁶⁾である。サディアから東南のブラマプトラ川の支流域で大葉種の茶樹が自生していたが、それがイギリス人には茶とは認識されていなかった。茶樹が中国以外には存在するはずがないという当時の思い込みゆえである。

ただし、この先住民であるジュンポー族は、アッサム自生茶を利用していたという証拠がある。磯淵は以下のように述べている。

雲南省を故地とする^{タイ}傣族は、少数民族へと分離しながら、西と南へ移住していた。特に13世紀はその活動が最も活発になり、西方への波及の先端は、シャン州を越えてアッサムへ到達したのである。それを率いたのはシャン族のスカーパで、アッサムに居住を決めてからは、族と名乗り、1228年、王になった。（中略）

一方、より三角形の頂点に近いカチン州では、雲南省の北部から徳昂族が入り込み、カチン州ではパラウン族と族名を変えて住みついた。そして、アッサムの東端から勢力を伸ばし、パラウン族はさらにジュンポー族と名乗ってアッサム地に定住していったのである¹⁷⁾。

上述のように、ジュンポー族に飲茶習慣があったとすれば、アッサムにおける茶の利用は少なくとも12世紀までさかのぼることができる。ジュンポー族はもともと中国の雲南省では傣族といわれた広義のタイ系民族である。彼等は雲南省南部で茶を利用しており、その飲用習慣もアッサムに帯同したと考えられる。先述したように、アッサムでは自生の茶樹が古くから存在していたが、ジュンポー族より以前に住んでいたアッサム先住民たちはその茶に関する知識がなく、積極的に利用しなかったと考えられる。上の推察から、アッサムにおける茶の飲用や利用は少なくとも12世紀までさかのぼることができる。しかも茶樹自体はもともと自生していた可能性が高い。

もっともアッサムで自生茶を発見したのはブルース以前の1815年に、イギリス陸軍のレーター大佐 (Colonel Latter) がすでに茶樹を発見している¹⁸⁾。彼はアッサム山岳地帯に居住しているジュンポー族が自生茶の葉を取って、油やニンニクを入れて食べたり、飲み物にして利用していたりしていることをカルカッタのイギリス商館に報告している¹⁹⁾。しかし彼のこの大発見は大きくとりあげられなかった。その理由として、当時のイギリス人植物学者は、中国に存在する小葉種しか茶樹として認識していなかったためである。レーター大佐が発見した大葉種は茶と認められなかったのである。

それから8年後、1823年には、インド人のデワン・マニラム (Dewan Maniram) が、アッサム地方でジュンポー族が茶を使用し居住地で茶樹が存在することを教え、ジュンポー族の首長であるビーサ・ガムをブルースに紹介した。そして、ジュンポー族首長はブルースに茶の種子を渡す約束をした。しかし、翌1824年、第一次イギリス・ビルマ戦争が勃発したため、ブルースは戦地に派遣された。1825年の停戦後、ブルースはようやく茶の種子を入手することに成功した²⁰⁾。ブルースがアッサム北東部の丘陵地帯で自生の茶樹を発見したのは1823年であったが、実際に種子を入手したのは1825年であるため、この年がアッサムにおける茶樹発見として知られようになる。

4. ヨーロッパ人の茶との出会い

茶は、歴史的には東アジアで利用される飲料であり、特に、中国をはじめ、日本で長い間利用されてきたが、ヨーロッパに流入したのは、かなり時間が経過してからのことである。世界の三大非アルコール飲料であるココア、茶、コーヒーのうち、最初にヨーロッパに入ってきたのはココアである。その原料であるカカオは中南米原産であり、1528年にスペイン人がメキシコ経由でヨーロッパに持ち込んだと考えられる²¹⁾。

17世紀になると、この三大飲料に関する出版が増える。1641年、ニコラス・テウルプ博士は、『医学論』の中で茶を大いに称賛し、1678年に彼の『茶論』が出ると、茶の普及には大きな影響を与えた²²⁾。

(1) イギリス人の茶との出会い

茶が初めてイギリスに輸入されたのは、17世紀の初頭であるが、正確な年代は分からない。ただ史料として茶を記録しているイギリス人は、平戸商館に来ていたイギリス東インド会社社員のリチャード・ウィッカム (Richard Wichkam) とされる。彼が、イートン (W.Eaton) に宛てた1615年6月27日の手紙では、そのなかで彼は、ミヤコから良質の茶を一壺送ってほしいと書いている²³⁾。年代からみれば、おそらくそのミヤコとは畿内のことであろうと考えられる。この依頼状から、イギリス人が1616年頃、茶の存在や生産の状況を日本で知ったと推定できる。しかし、この依頼状だけから茶がいつイギリス本国に入ったかは不明である。

出口は、イギリス人の中では1600年ころにすでに茶を飲んだ可能性が高い人としてウィリアム・アダムズをあげる。彼はイギリス東インド会社の平戸商館で重要な役割を果たした人物で、かつ徳川家康の外交顧問でもあったため、かなり上質の茶を飲む機会に恵まれていた²⁴⁾と推測している。出口は、ハルレル (1964) の文献によって、1645年にオランダ人にイギリスに茶がよってもたされた²⁵⁾と述べている。

しかし、前述したように、実際は、ヨーロッパに初めて茶をもたらしたのはポルトガル人であり、オランダは、17世紀初頭にイギリスに茶を招来しているのです。そのチャネルを通じて、情報のみならず、茶自体も他国が入手していた可能性は高い。つまり、茶がイギリス本国に入ったのが史料として確実に追えるのは17世紀後半であるが、17世紀初めまで遡る可能性は十分考慮する必要がある。

ただし、イギリスで茶が一般市民に販売されたのはかなり後のことである。1650年代後半までは茶は上流階級の人々の飲料であり、一般庶民の手の届かない商品であった。イギリスでは、茶が一般的に流行したのは、アン女王(Queen Anne)²⁶⁾の治世からである²⁷⁾が、一般庶民への茶の普及したのは18世紀の初めころとされる。

トーマス・ギャラウェイ(Thomas Garraway)はロンドンの煙草商で、一般に茶の葉を売り出し、店で茶を飲ませたのは最初の人物であり、1657年のことである。これは中国茶である可能性が高い。

(2) イギリス本国における茶の流行

上述したように、ヨーロッパの中で茶を初めて知ったのは、おそらくイタリア人あるいはポルトガル人であろう。イギリスは、他のヨーロッパ諸国に比較すると茶の飲用は遅かったが、わずかの期間で飲用者が増えていったことは注目される。

イギリス東インド会社の船が最初にイギリス本国に運んだ茶の量は、142ポンドに過ぎなかった²⁸⁾。それから1721~30年の間にその量がおよそ10倍に増加し、4027トンに達した。1730年代~40年代の間にはあまり増えていないが、1740年代からその量が10年ごとで2倍ずつ増加した。1766年には、正規の輸入が約2700万トン、他に密輸が約2300万トン、つまり合計で約5000万トンに達した。このためイギリスでは茶の対価として支払う銀が不足する²⁹⁾。この時期からイギリスが中国茶の支払いにかなり苦しみ始める。さらに、1760年代以後は、茶の輸入量が大幅に増加し、1860年代にその量が49,866トンまで達した。それ以後もイギリス本国における茶の輸入量が増え続く。1930年代からその輸入量

インドにおける中国茶・アッサム自生茶の移植・栽培の相克についての考察(野間・ロシャン)

が、224,989トンまで達し、驚くほどの輸入量の数字が出てくる。さらに、1930年代から急激に増えた。1984年にその輸入量が216,512トンまで達した。

その茶のイギリス本国への輸入量が、いかに急激だったかは以下の表1から明らかになる。

このように表1からもわかるように、イギリスの茶輸入量は1721~30年にわずかに4,027トンであったが、その2世紀後、1934~38年の間には、22万4,989トンまで達している。イギリスでは、一日一億6,500万杯の茶が飲まれており、一人当たり平均にすると3杯を超える。

なぜ、イギリス人は茶をそれほど好むのだろうか。イギリス本国に茶が流通した要因に関しては、以下のようなさまざまな意見が交わされてきた。

人間の人体は80%が水から成立している。そのため、水が世界中を支配しているわけである。さらに、人間は、1日少なくとも1ℓ~2ℓ水分を摂取する必要がある。水の代替飲料としてワイン、コーヒー、ビール、ココアいくつかの飲料を挙げられる。しかし水以外の飲み物には何らかの有害物質が含まれているため、代替飲料にはなりにくい。パスツール³⁰⁾が乳酸菌・酪酸菌を発

表1 イギリスの支出国別茶輸入推移

(単位 t)

年	インド・ パキスタン*	中国	セイロン	インドネシア	日本	その他	計
1721~30		1,816					4,027
1731~40		2,879					5,290
1741~50		4,916					9,169
1751~60		11,209					16,942
1866~75	3,892	45,974					49,866
1876~80	15,264	55,947					71,211
1881~85	25,830	51,013	944				77,787
1886~89	37,876	38,157	7,171				83,204
1934~38	125,387		68,148	15,469	3,037	(含アフリカ) 12,948	193,600 224,989
1952~56	147,349		55,837	4,938	1,302	(含アフリカ) 21,342	230,768

資料：松下『年表茶の世界史』、1985年、から新しい年代を削除、改変。

*インドにパキスタンが含まれる。1952年以後、パキスタンは含まない。

見するまで、飲み物にはなれなかった。ワインやビールにはアルコールが含まれているため、どんな人でも程度の差はあるものの飲むと酔ってしまう。その上、これらが幼児・小児には一般飲料になることも不可能である。ココアの場合は生産コストが高いため、値段も高くなるのは当たり前のものであり、一般の飲料になることがむずかしい。また、コーヒーとココアには、カフェインが含有され、コーヒーやココアを水のように大量に飲めないため、水の代替飲料になるのが難しい³¹⁾。

茶が他の飲料より価格的に安く、しかも人体に害がなかったため、イギリスだけではなく世界中で一般飲料として普及した主な要因である。1657年、ギャラウェイによって、ロンドンのオックスフォードで初めてコーヒーハウスが開店される。その後、コーヒー文化が流行し、次々とコーヒーハウスが誕生する³²⁾。イギリスの場合は、1660年代にコーヒーハウスの全盛期を迎える。ただしコーヒーハウスの利用者は当時は男性が中心であり、女性は入店を禁止されていた。このことがイギリスでは茶が女性のあいだに流行することと関連する。しかもイギリスでは、茶が「魔法の飲料」と呼ばれ、茶を飲んだら不老長寿となると信じられていたことも、茶が圧倒的に支持されてきた要因といえよう。ここに飲用としての茶の慣習が成立する。

その他、イギリスでは1657年、コーヒーハウスで初めて茶の販売目的で宣伝するために、ギャラウェイが出版した広告が、イギリスにおける茶の流行に主な役割を果たしたことは間違いない。その報告の効能として、以下を列挙する³³⁾。

1. 粗悪でどんみりした血液を浄化する。
2. 陰鬱な夢を抑制する。
3. 脳に重くのししかかるものを和らげる。
4. 頭痛やめまいを和らげ癒す。
5. 水腫を防ぐ。
6. 頭のなかの湿った体液をかわかす。
7. 生傷を治す。
8. 閉塞物を除去する。

9. 目がよくなる。
10. 古い体液と熱くなってしまった肝臓を清浄にし不純物取り除く。
11. 膀胱腎臓の欠陥を浄化する。
12. 過剰な睡魔を追い払う。
13. めまいを防ぎ、敏捷で勇敢にする。
14. 心臓を強化して、恐怖を追い払う。
15. ガスがたまることからくる結腸の痛みを追い払う。
16. 内臓を強化して、消耗病を防ぐ。
17. 記憶力を強化する。
18. 意志をとぎすまし、理解力を早める。
19. 胆嚢を安全に浄化する。
20. 適切な慈悲心の行使を強める。

茶がイギリス人に愛好されるようになったもう一つの事情として、茶がイギリスの風土に適したビタミンCの補給源になっていたのではないかという説がある。イギリスの水は硬質である。硬水はそのまま飲用しても美味しくない。そのため、イギリス市民は茶を愛飲したのである³⁴⁾。

イギリスで茶が流行するのにポルトガルの王妃キャサリン³⁵⁾が果たした役割もかなり大きい。キャサリンは王宮で茶会を開いたり、家族や親戚と茶を飲んだりした。その影響で、キャサリンがイギリスへ渡るまで、イギリス本国で茶は薬品として考えられたが、彼女の影響で茶が薬から一般の飲み物となったのである。これはキャサリンの影響で変わったことも否定できない。このように、東洋に生まれた茶が西洋の小さな島国に大流行する。

(3) イギリス人の要求と紅茶の誕生

茶は現在、水を除けば最も多くの人びとに愛飲されている世界の代表的な飲料のひとつである。その多くは中国・日本以外では、完全発酵した紅茶である。現在では世界の茶の約8割が紅茶である。その発祥地の一つは、福建省武夷山の山奥・桐木関であることとされる³⁶⁾。ただし、紅茶がいつ頃から製造されて

飲まれるようになったかよくわからない。また最初に、飲用していた緑茶がどのようにして、紅茶に転換したのかの正確な記録や史実も残っていない。

紅茶の誕生に関しては中国からイギリスへ船で運ばれていく緑茶が途中で、南海の赤道を通過する際、船倉に詰め込まれていた茶の葉が、高温と湿度によって発酵してしまい、紅茶になったという俗説がある³⁷⁾。しかし、そのような単純な推測で商品にまで高められるとはとても思えない。

ヨーロッパ人の中に初めて緑茶と紅茶の区別を知り、詳しく紹介した人物としてR. フォーチュン³⁸⁾の紅茶加工法に関する記述がある³⁹⁾。現在、行われている紅茶の発酵法によると、緑茶が自然に発酵し、紅茶に転換することはまず不可能である。今日、我々の生活の中の必需品となっている紅茶の製造は、18世紀に完成した「工夫紅茶」(コングー紅茶)が基本となっている⁴⁰⁾。しかし、現代中国の研究者・呉覚農^{ウージュエニン}は、16世紀に書かれた文献をもとにして、福建省武夷山の発酵茶はすでに15世紀に出現していた⁴¹⁾と推定している。

ただ中国では、この前の段階として、半発酵茶である烏龍茶の存在を想定するのが自然である。三谷は、当時のヨーロッパでは、緑茶が主で、紅茶の方は半発酵茶のボヘア茶と推定している⁴²⁾。以上のことから考えられることは、ヨーロッパ人、その中でもとりわけイギリス人が茶を飲み始めてから、紅茶が誕生した可能性は大きい。

中国人は自分たちが飲む紅茶と外国へ輸出する紅茶の発酵法が異なるという。中国人は紅茶はあまり好まない。中国人に次いで茶を早い段階で飲用ようになった日本人も当時、紅茶をあまり好まなかった。つまり中国人は紅茶の製造をほぼヨーロッパへの輸出目的で行っていた⁴³⁾。ここで推定できることは、ヨーロッパで茶を飲み始めてから、現在のような紅茶製造が始まったという事実である。茶がヨーロッパへ渡ったのは17世紀の初頭なので、紅茶が16、17世紀に誕生したという話はちょっと早い。しかし、上にも述べたように、緑茶がどのようにして紅茶に転換したかはっきりしない。ここでは緑茶の紅茶への転換経過を推測してみたい。

ヨーロッパに初期に流入した茶が最初は緑茶だったことに疑いない。緑茶と

インドにおける中国茶・アッサム自生茶の移植・栽培の相克についての考察(野間・ロシャン)
同時に烏龍茶も流入したかもしれない。イギリス人は緑茶にしる、紅茶(おそらく、半発酵の烏龍茶)にしる、いずれにしても砂糖やミルクを加えて飲用する風習があった。イギリスは硬水のため、砂糖やミルクを混合させても緑茶ではあまり美味しくない。むしろ、砂糖とミルクを混ぜた半発酵の烏龍茶が美味しかったと思われる。イギリス人は緑茶よりも烏龍茶を嗜好したが、より美味な品質を要求するなかで、烏龍茶の改良がなされた可能性が高い。

イギリスでは18世紀の半ばから産業革命が興り、外貨獲得によって、生活が豊かになると、国民は当たり前のことのように、贅沢品や奢侈品を要求するようになった。植民地からの砂糖の流入も増加してきた。茶も自分たちの口に合うようなものに改良することを要求した。中国人もイギリス人の要求に応じて茶を改良していくうちに、紅茶が誕生したという推測ができる。

松下の『アッサム紅茶文化史』にも1720～1930年代の間に紅茶がイギリスへ流入した記録が記されている⁴⁴⁾ため、おそらく紅茶が18世紀の半ば頃に誕生したと推測される。初門で紅茶を完成させたのは、胡元竜が最初である。彼は南部、貴溪の人で、1876年に日順茶工場を開設して、ウーロン茶を改良して、「初門紅茶」を完成させた。さらにウーロン茶を進化させることで紅茶が誕生したと考えられる⁴⁵⁾。上述の事実を参考にするならば、紅茶の誕生はもっと遅くなるが、紅茶に関するいろいろな本を参考にすれば、私たちは紅茶の誕生は18世紀の半ばまでに完成したと考えたい。

6. 中国茶の入手とインドにおける移植・栽培

イギリス人が1770年代から茶栽培に関する研究を始めていたという記録がある。1778年、王立協会(ロイヤルソサエティ)会長の博物学者であるジョセフ・バンクス卿(Sir Joseph Banks)は、茶が北緯26度から30度の地域でよく生育するという研究報告を発表している⁴⁶⁾。さらに、バンクスの意見に応じて、1780年、イギリス東インド会社の船主は、中国・広州から茶の種子を持ってきた茶の種子は、カルカッタで植物園に播種された。その余りの種子をロバート・キド将軍は自宅庭にも植えた。これがインドにおける中国茶の栽培の最初とし

て記録される。

イギリスは1770年代から中国との貿易で、茶の代金支払いに困っていたため、かなり早い時期から茶栽培をインドで考えていたと思われる。インドにおける茶栽培の動きは1790年代にもあった。1793年、バンクスがマッカートニー卿(Lord Macartney)と一緒に北京へ使節として派遣された。その目的は、茶栽培や製茶法などの詳しい情報を学び、茶種や茶苗を中国からインドへもたらすことであった。その後、バンクスとマッカートニーは茶の種子を中国で収集することに成功し、カルカッタへ搬送しようとした。残念ながら、その茶は何らかの原因で船内に紛失したため、カルカッタまで届かなかった⁴⁷⁾。

このようにイギリス人の茶の移植の試みはたびたび試みられている。その一方で、イギリス人は1770年代から茶の支払いに悩み始めたのである。1770～1779年の間に中国からイギリス本国に入った茶の量が急増し、51,000,00ポンドにまで達する⁴⁸⁾。それだけではなく、1776年にアメリカ合衆国が独立すると、その影響でメキシコからの銀供給が停止し銀価格が高騰した。その一方で、イギリス本国での茶の重要は年々増していく⁴⁹⁾。こういったことが、イギリス人にとって、インドでの茶栽培の原動力になっていったと考えられる。

このようにイギリス人はインドで中国茶の栽培に関する研究を行い、さまざまな人物を定期的に中国へ派遣したが、清朝の閉鎖主義に阻まれ、思うように情報や技術は入手できなかった。そのため、インドでの本格的な茶栽培にも着手できなかったのである。

理由として考えられることは、東インド会社はインドで茶を栽培すると、中国とイギリスの間に仕組まれた中国茶取引の独占権を失ってしまう恐れであった。そのために、イギリス人はインドで茶の大規模栽培をしなかった。しかし、1833年に中国がイギリス東インド会社に与えていた茶輸入の独占権が廃止されると、イギリスはインドにおける茶栽培に力を注ぎ始めた。国家の利益と一貿易会社の利益がしだいに乖離していったことの証左でもある。

茶の独占取引権が廃止されると、翌1834年1月にはインド総督ウィリアム・ベンティンク(William Bentinck)がインドにおける茶栽培を検討する茶業委

インドにおける中国茶・アッサム自生茶の移植・栽培の相克についての考察(野間・ロシヤン) 員会(Indian Tea Board)を設置した⁵⁰⁾。そのメンバーには多くのイギリス人も就任している⁵¹⁾。この茶業委員会の任務は、中国茶のインドでの栽培のために茶樹の導入とその栽培の実施と監督の立案にあった。1830年代には、アッサム自生の茶にかかわる地質についてさまざまな研究が行われる。その諸情報から科学者の間では、アッサム自生茶は、中国茶と同一ではなくが類似したものであり、アッサム地方でも中国茶の栽培が可能であるという認識が共有されていった⁵²⁾。

1934年3月、ベンティンクは茶業委員会のメンバーであったカルカッタに本社を有するマッキントッシュ社のゴードン(George James Gordon)を、一刻も早く中国へ出航させるように指令を出した。ゴードンの任務は、茶の栽培と製造技術の研究・茶樹と茶種子の収集・茶に関する中国人技術者の招聘であった⁵³⁾。この時、ゴードンは中国内陸部の茶産地には入る事はできなかったが、茶の種子を収集することには成功した。1835年にカルカッタに送られてきた種子は、優良茶樹からのみ採取した種子であったため発芽した⁵⁴⁾。その結果、アッサムにおける茶栽培の可能性は著しく高まった。

アッサムにおける茶栽培が開始される前に、色々な議論が交わされた。主にカルカッタ植物園のウォーリッチ(Wallich)と有名な植物学者グリフィス(W.Griffiths)の二つのグループに意見が分かれた。その争点は、中国茶かアッサムの自生茶のどちらを優先的に栽培するかであった。ウォーリッチはアッサムで純粹の茶が自生しているため、自生茶栽培を主張する。中国茶を導入の場合、粗悪品混入のリスクもあり、コストもかかるため、中国茶の種子や苗などを導入する必要はないと表明した⁵⁵⁾。

これに対して、グリフィスは中国茶に関してのレポートを書き、アッサムの自生茶が、長年栽培されてきた中国茶に勝ることは考えられないとして、中国茶の種子の輸入を続行することを決定した。

グリフィスは中国茶の導入を主張して、次の3つのポイントを挙げている。
① アッサム河谷盆地と中国茶栽培地域の地質の類似、② 自然条件、とりわけ、温度・湿度の類似、③ アッサムや中国茶栽培地域で存在する植物相の類似⁵⁶⁾。

東インド会社はグリフィスの意見を採用し、ゴードンが中国から搬送した中国茶によって、インドにおける茶栽培を開始した。

1834年8月8日、チャルトン (Lieutenant Charlton) 中尉がディブル川の周辺にジュンポー族が茶を栽培し、日常飲用していることを見つけた。その茶の苗をカルカッタに送り、ゴードンを一時的に呼び戻された⁵⁷⁾。

しかし、アッサム自生茶を本格的に作付けすることには向かわなかった。グリフィスの意見に応じて、1835年9月にはゴードンを再び中国に派遣した。東インド会社はそれ以降も定期的に中国茶の種子をインドに輸入し、インド各地における中国茶の栽培を続行する⁵⁸⁾。

その後、上述したように、1835年、アッサムのサディア近くのコーンディル (Koondil) 川とブラマプトラ川の合流点にゴードンが中国から搬送した中国茶によって実験茶園が設置された。

7. アッサムにおける自生茶と中国茶の栽培動向

アッサムにおける茶栽培が開始される以前、ウォーリッチとグリフィスの間に中国茶かアッサム自生茶という議論されながら、両論併記のような形で中国茶を栽培が継続され続けてきた。しかし、中国茶が最終的にすべて枯死してしまう。1836年10月1日、ブルースはサディアのプランテーションの中止を勧告し、その代わりにジャイプール (Jaipur) に移植することを推奨した。それから、しばらく、アッサムの茶栽培は中止される。

19世紀後半には南インドのニルギリ (Nilgiri)、マイソール (Mysore)、マドラス (Madras) などでも茶栽培が開始される。この新しい地域で行われる茶栽培に関して、グリフィスは、インドにおける茶栽培が議論され、中国茶の導入が決定された後、中国茶の種子が山岳地帯・上アッサム・東部インドに植えられることになった。その後、東部インドに6箱、ニルギリ・クールグに6箱、マイソールに6箱、マドラスの園芸協会に6箱が分配された。ニルギリの種子は箱に長時間入れっぱなしだったため、ほとんど枯死してしまい、クールグにおける実験もほぼ失敗した。マイソールにおける茶樹もほぼ全滅であった。

インドにおける中国茶・アッサム自生茶の移植・栽培の相克についての考察 (野間・ロシャン) 結局、インドにおける中国茶の栽培実験はすべて失敗に終わったと総括している⁵⁹⁾。

(1) アッサムにおける中国茶栽培の失敗要因

アッサムにおける茶の実験栽培あるいは茶栽培の失敗の原因は、つぎの4つの原因だったと言われている。

1) この最初の実験茶園は砂層の上に沖積土が堆積しているため、幼木を移植しても根の先端が栄養分に乏しく透水性に富んだ砂層でほとんどが枯死した⁶⁰⁾。

2) 中国の小葉種はアッサムの地質と気候に適応していなかった⁶¹⁾。

3) 当時イギリス人は中国人は誰でも茶栽培に関する知識を持っているという思い込みがあった。アッサムにおける茶栽培を開始するために、中国やシンガポールから数百人の中国人が集められたが、彼らは専門の製茶技術者ではなく、製茶に関する知識が全く知らない靴職人や大工であった。

4) 中国人、とりわけ支配者層は、茶が中国以外の地に持ち出すことを好まなかった。そのため外国人に茶の種子を売る前に、その種を発芽しないように茹でてから売っていたという噂もあった⁶²⁾。当時、ゴードンが中国からもたらした茶の種子は、自分で直接入手したのではなく、中国人から購入したことからも推定できる。

こういう試行錯誤の過程を経て、イギリス人は、中国茶とアッサム自生茶が異なる生態に適合する別個の種子であり、アッサムにおける茶栽培が失敗に終わったの原因であると考えようになった。

(2) アッサムにおける自生茶の栽培開始

アッサムでは、中国茶が導入される以前から、ウォーリッチのグループが、自生茶の栽培を試みており、中国茶の栽培とともに、アッサム自生茶の栽培もすべきだという声が強くなり、自生茶の研究も細々とは続けられていた。

中国茶が失敗した1836年には、ブルースはアッサム茶園監督官となっていた。中国茶の実験栽培が失敗したため、彼は中国茶の代わりにアッサム自生茶の栽

培を指示する。ブルースは以前から中国茶のインド各地での栽培を進める傍ら、アッサムの自生茶の調査・研究を単独で行っていた。彼は1836年からマタック (Muttack) 周辺のアッサム自生茶樹を利用して、ジュンポー族などを使って摘葉させ、ゴードンが中国から連れてきた製茶技術者に製茶させている。ただし中国から移入した中国種の茶はいまだに茶葉収穫が可能になるまでは成長していなかった。そのためしばらくの間はアッサム自生茶葉からの生産が続けられた⁶³⁾。イギリス人は中国茶の代わりに自生茶を栽培し始めたあとに、意外にもアッサム河谷で成功を収めたのである。その後、アッサム周辺の何か所に自生茶が栽培された。

その一方で、新しく設立されたアッサムの茶園には中国茶が移植された。1836年11月21日、ゴードンが招聘した中国人の茶プランターによって、少量のアッサム自生茶が再びサディアに移植された⁶⁴⁾。1839年頃からはチャプア、チョタ・ナグプール、ティングリなどでアッサム自生茶と中国茶と一緒に移植された⁶⁵⁾。

このように、最初は商品的な茶としては認められていなかったアッサム自生茶が、発見から13年後によく認知されるようになった。もし、サディアで行われた最初の実験茶園が成功したら、アッサム自生茶は導入されなかっただろう。その自生茶の葉を使用し、製茶した茶は当時のインド監督であるオークランド卿にまで良質と認められた。また、1838年5月、アッサム産の茶8箱(350lbs.)がイギリス本国に向けて初めて搬送された。これはイギリスに送られたアッサムで最初の茶のみならず、イギリス植民地で製造された初めての茶でもあった。これは、イギリス茶栽培史のなかに大きな意味を持ち、インド茶産業の新たな出発点となった。

(3) アッサム周辺における茶栽培の拡大

1836年の、アッサム地方のサディアでの茶栽培の開始によって、徐々に周辺地域にも栽培が拡大していった。サハランプールの気候は中国茶に適合した。東インド会社が管理するとカルカッタ植物園長のロイリー博士(Dr. Royle)は、

インドにおける中国茶・アッサム自生茶の移植・栽培の相克についての考察(野間・ロシャン)
クマオン (Kumaon), グルワール (Guruwal), シルモレ (Sirmor) が適地であることをインド政庁に勧告した。1836年にはファルコーナー博士 (Dr. Falconer) の手によっても茶栽培が進められる。1839年2月にはイギリス東インド会社の認可によって、ベンガル茶業組合 (Bengal Tea Association) が設立された。

その直後に、ロンドンの商人たちが訪印している。彼らによって、茶の栽培あるいはイギリスへの輸出する目的で多くの茶会社が成立された⁶⁶⁾。1840年代から茶生産が急激に増加し、企業的な大農園 (estate) が誕生した。1848年からはアッサム茶会社が利益をあげるようになり、ティングリ (Tinguri) でも茶栽培が開始された。

1850~51年には民間初の茶園が設置される。また、1853年に茶園がシバサル (Sibsagar) で3つとラクিমポール (Lakimpour) でも6つの農園が設置され、1859年までにアッサム周辺で茶園は53となった⁶⁷⁾。さらに、イギリス人は茶栽培や茶園の拡大に庶民の参加も歓迎している。アッサム自生茶の代わりに中国茶の導入されたことから、一刻も早く茶園が発展して欲しいと望んでいたのではないかと考えられる。1850~1851年、H.ブルキンヨング (Henry Burkinyoung) によって、ヌマリガード (Numarigardh) で、1853年、ウィリアムソン (George Williamson) によってシンネマラ (Cinnemara) で茶の栽培が開始される。

アッサム茶会社はC.A.ブルースとJ.W.マスターズの下で、アッサムの南部と北部区域に分けて茶を栽培した。1838年、アッサム茶会社は、アッサム周辺で茶が自生する森林を調査し、その森林を20年間無利子借地して茶栽培が開始された。1842年に、南部区域では1645エーカー、北部区域では666エーカーで茶が栽培されている。1849年、チューブワ (Chubuwa), 1850年、ディブルガード (Dibrugarh) にも栽培が開始された。1853年には、ウィリアムソン (Williamson) がシンネマラ (Cinnemara) で借地を申し込み、720エーカーで茶栽培を開始した⁶⁸⁾。

1850~51年ハンネー中佐 (Lieutenant-Colonel F. S. Hannay) はディブルガードの近くに茶園を設置した。実は上述したシバサル (Sibsagar) とラク

ムプール (Lakimpoor) の茶園もハンネーに触発されて設置されたものである。ラキムプールとシブサガルに茶栽培が開始されてからまもない1859年には、アッサムで民間茶園数は51に達する。

1858年から民間茶園の設立が盛んになり、アッサム茶会社と民間茶会社の間で厳しい競争が始まる。そのため、1859年、アッサム茶会社が W. ロバート (William Robert) の下にジョルハット (Jorhat) で£60,000の大規模の茶園を設置した。それからジョルハット茶会社の下にシンネマラで343エーカー、ヌマリガードで289エーカー、オアティングで99エーカー、コリアバールで100エーカーの茶園が設置された⁶⁹⁾。

アッサムにおける茶園が開始される以前には、インド各地での茶栽培可能性調査が行われた後に、アッサムだけではなく、ニルギリやクマオンなどにも茶栽培が認められた。この周辺は気候条件から茶栽培にとっては適切な地域であると思われたからである。1843年8月にはベンガル地方東部のチッタゴン (Chittagong, 現バングラデシュ国の東の地域) にも実験茶園を開設し、その翌年には茶栽培も開始された⁷⁰⁾。

1841年、キャンベル (Dr.Campbell) は、クマオン (Kumaon) から中国茶種を持ち出し、ダージリンの自宅で植えた⁷¹⁾。彼は1839年からダージリンの地区長官に任命され、それ以後30年間ダージリンのヒルステーション開発に指揮をとるようになった。彼はダージリンにおける茶栽培を奨励した⁷²⁾。ただしダージリンにおける本格的な茶栽培は1856年でアルバリ (Alubari) 地区でのものである。それ以前にもダージリンにおける茶栽培が1854年にハッピー・バレー茶園で行われていたが、その記録はほとんど見つからない。ダージリンの気候は中国茶の栽培にとって最適であったため、ダージリン茶園は急速に繁栄した。その結果、インドにおける茶栽培は新時代を迎えた⁷³⁾。

実は、アッサムのサディアで実験茶栽培が行われる前に、カチャール (Cachar) で自生茶が発見されていた。しかしそれは茶とは認められず、1855年まで無視されてきた。それから、1856年クーリー (Cooley) がたまたま丘陵で茶を再発見している。その後、次々と私設茶園会社が設立され、カチャール

表2 アッサムの茶園面積の推移

年	面積 (エーカー)
1880年	153,657
1885年	197,510
1896年	291,909
1900年	337,327

資料 : Sanat Kumar Bose, *Capital and Labour in the Indian Tea Industry*, All India Trade Union Congress, 1954, p.5.

における茶栽培が拡大した⁷⁴⁾。

インド茶業は、19世紀後半から著しく成長した。19世紀の後半まで、中国茶が支配していたイギリス市場にインド茶が大きく食いこむことになった。1866年に、インド産の茶はイギリス市場の4%しか占めていなかったが、1903年に、31%を占めるまでになった⁷⁶⁾。

ボース (1954) によれば、1900年までに、アッサムの茶栽培面積は表2のように拡大している。1880~1900年までのわずか20年間に茶園面積は倍増している。

8. おわりに

アッサムにおける茶の存在は文献では少なくとも12世紀まで遡る。しかし、1823年、ロバート・ブルースによって「発見」されるまで、アッサム自生茶の存在が世間に知られていなかった。アッサムにおける茶栽培が開始される約10年前に自生茶が「発見」されたが、イギリス人は良質の茶は中国で栽培されるものしかないという先入観のため、その自生茶は無視された。そのため中国茶がインドで栽培されるようになる。その上、イギリス東インド会社はインドで茶を栽培すると、中国との茶取引の独占権が乱されると考え、自生茶の代わりに中国茶の栽培を奨励するようになった。

中国からインドへ茶を持ち出すために、1792年海外の植物採集の総元締であるバンクス卿はマッカートニーを中国へ派遣した。彼によって、中国から茶樹と種子をカルカッタ植物園にもたらされた。ところが、その時、輸入した茶苗

と種子は栽培目的というよりは研究目的であった。

1834年には、茶の種子を入手するため、ゴードンが中国へ派遣された。1835年、ゴードンの手によるカルカットに送られてきた茶の種子で、インドにおける茶栽培が開始された。イギリス人は自分の領内で一刻も早く茶栽培という意識が強かったため、さっそく、翌1836年にはアッサムのサズィア近くのコーンディル川とブラマプトラ川の合流点に実験茶園が設置された。だが、この最初の実験茶園の茶樹はほとんど枯死してしまい、茶園開発は失敗に終わった。アッサムにおける茶栽培が失敗の原因の中の主な原因は、中国種がアッサムの高温多湿な気候と砂質土壤に適用していなかったためであると思われる。また、茶栽培に関する無知な中国人の招聘もアッサムにおける茶栽培が失敗終わった最も主な原因のひとつであった。

それから、1836年11月21日、ゴードンが招聘した茶栽培の知識をもった中国人茶プランターによって、茶がアッサムに移植され成功をおさめた。その後、アッサム周辺にも茶栽培が徐々に拡大される。中国茶樹の場合は、定期的に刈り込みをして低木の状態に保つ必要がある。しかも中国茶樹の寿命はおよそ50年と短く葉数も少ない。それに対して、野生アッサム茶の場合は、気候条件の許容範囲が大きい。さらに、葉数も非常に多くて、長期間の生育が可能である⁷⁶⁾。

アッサムにおける茶栽培に関して、もし1833年東インド会社の中国茶の輸入の独占権が切れていなかったら、アッサムにおける茶栽培が開始されていなかっただろうし、インドは第一の茶生産国にもならなかっただろう。イギリスの水が硬質のため、イギリス市民の要求によって、紅茶が誕生したこともある程度推測できた。アッサムの大規模茶園の成立は、中国との茶貿易を断ち切り、アッサム自生茶を輸出商品にまで成長させる過程でもあった。その間はわずか50年であった。しかし、イギリス人好みの紅茶を生み出す製茶法の完成にはなお年月を要したのである。

しかしながら、本論ではインド・アッサム周辺における茶栽培・拡大に関して、とりわけダーズリンに関しては詳しく触れなかった。別稿で論じたい。

インドにおける中国茶・アッサム自生茶の移植・栽培の相克についての考察(野間・ロシャン)

〔付記〕

本稿は、関西大学のグローバルCOEプログラムの研究成果である。共著者のロシャンは富士ゼロックスの2010年度の在日外国人留学生研究助成「茶をめぐる中国・インド世界・日本の文化交渉学研究——ダーズリンの「茶帝国主義」とティー文化の形成——」を受けてコルカタ、ダーズリンでの史料収集が可能になった。なおこの初稿はロシャンが担当し、それを野間との討議の上、まとめたものである。その後、日本学術振興会の挑戦的萌芽研究「英国人プラントハンターの探査と商業主義の相克——植物をめぐる文化交渉学の構築——」(課題番号23650566, 2011年度, 研究代表者 野間晴雄)をうけたので、製図などの経費に充当した。記して謝意を述べたい。

キーワード：アッサム, 中国, 茶, イギリス, ヨーロッパ, イギリス東インド会社

Key Words : Assam, China, Tea, Britain, Europe, British East India Company

注

- 1) 滝口明子『英国紅茶論争』講談社, 1996年, 12頁。
- 2) ヴィクター・H・メア, アンリー・ホー著, 忠平美幸訳『お茶の歴史』河出書房新社, 2010年(原著はVictor H. Mair & Erling Hoh. *The True History of Tea*, Thomas & Hudson Ltd.; London, 2009)。
- 3) John C. Evans. *Tea in China: the history of China's national drink*, Greenwood Press, New York, 1992, p.1.
- 4) 最近の茶の医薬史的研究によると、唐代の『新修本草』で茶が初めて採録され薬品と認められたが、1～2世紀に書かれたとされる『神農本草経』の苦菜を茶と推定している(岩間真知子『茶の医薬史—中国と日本』思文閣出版, 2009年, 3-4頁, 201-216頁)。
- 5) 前掲2), 53-57頁。
- 6) ビアトリス・ホーネガー著, 平田紀之訳, 『茶の世界史—中国の薬用から世界の飲み物へ—』白水社, 2010年, 67-68頁。
- 7) Percival Griffiths. *The History of the Indian Tea Industry*, Weidenfeld and Nicolson Winsley Street London, 1967, p.14.
- 8) 角山栄『茶の世界史：緑茶の文化と紅茶の社会』中央公論社, 1980年初版, 9頁。
- 9) 前掲8), 8頁。

- 10) 出口保夫『英国紅茶の話』東京書籍, 1982年, 70頁。
- 11) 春山行夫『紅茶の文化史』平凡社, 1991年, 19頁。
- 12) 山崎芳郎『年表茶の世界史』八坂書房, 1985年初版, 288頁。
- 13) 松下智『アッサム紅茶文化史』雄山閣出版, 1999年, 99-100頁。
- 14) 浅田晴久「タイ系民族アホムの稲作体系—インド・アッサム州の村落における事例研究—」, 人文地理, 第63巻第1号, 2011年, 42-43頁。
- 15) 前掲12), 178頁。
- 16) 茶の系統は大きく二つに分類されている。一つが, 小葉種(中国種)—葉の長さは7~8cm, 幅が3~4cm。もう一つは, 大葉種(アッサム種)—葉の長さは20~30cm, 幅が10~15cmである。
- 17) 磯淵猛『紅茶レジェンド』土屋書店, 2009年, 127頁。
- 18) 前掲12), 295頁。
- 19) 前掲13), 137頁。
- 20) 前掲13), 140-142頁。
- 21) ウィリエム・エチ・ウカルス著, 杉本卓訳『ロマンス・オブ・ティー』八坂書房, 2007年, 64頁。
- 22) 前掲1), 22頁。
- 23) 三谷康之『イギリス紅茶事典』日外アソシエーツ, 2002年, 181頁。
- 24) 前掲10), 86頁。
- 25) C.R.Harler *The Culture and Marketing of Tea*, Oxford University Press, New York, Bombay, 1964, p.225.
- 26) Queen Anne (1665年2月6日~1714年8月1日) 最後のイングランド王国・スコットランド王国君主(女王, 在位: 1702年4月23日~1707年4月30日)で, 最初のグレートブリテン王国君主(女王, 在位: 1707年5月1日~1714年8月1日), 及びアイルランド女王。
- 27) 前掲25), 155頁。
- 28) 前掲25), 84頁。
- 29) 荒木安正『紅茶の世界史』柴田書店, 1994年, 111頁。
- 30) Louis Pasteur (1822~1895)。フランス人化学者・細菌学者で, 近代微生物学の祖といわれる。ビールやワインの発酵や牛乳の酸敗微生物などを研究した。
- 31) アラン・マクファーレン, イリス・マクファーレン著・鈴木美佳訳『茶の帝国—アッサムと日本から歴史の謎を解く—』知泉書館, 2007年, 38-45頁。
- 32) James Burnley. *The Story of British Trade and Industry*, George Newnes Ltd. Southampton Street, Strand, London, 1904, p. 131.
- 33) 前掲31), 77-78頁。
- 34) 磯淵猛『紅茶の教科書』新星出版, 2009年, 50頁。
- 35) Catherine of Braganza. 1638年11月25日~1705年11月30日, イングランド王チャール

- インドにおける中国茶・アッサム自生茶の移植・栽培の相克についての考察(野間・ロシヤン)
- ズ2世王妃。ポルトガル名, Catarina.
 - 36) 工藤佳治『中国茶事典』勉誠出版, 2007年, 321頁。
 - 37) 前掲29), 107-108頁。
 - 38) Robert Fortune (1812-1880) スコットランド出身のプラントハンター。エディンバラの植物園を皮切りに, ロンドン国立協会, イギリス東インド会社などの依頼を受けて, 中国を中心に, 日本や朝鮮半島, インドなどで, 茶をはじめ, 各種の花木を収集し, イギリス本国に持ちこんだ。
 - 39) グレン・ロシヤン「ロバート・フォーチュンの中国茶に関する新たな知見—19世紀中葉の2冊の中国探訪記を中心に—」, 千里山文學論集, 第84号, 2010年, 57-74頁。
 - 40) 『世界・紅茶の基本』日本ホテル教育センター, 2007年, 28頁。
 - 41) 磯淵猛『一杯の紅茶の世界史』文藝春秋, 2005年, 27頁。
 - 42) 前掲23), 182頁。
 - 43) 前掲23), 66頁。
 - 44) 前掲12), 289頁。
 - 45) 前掲29), 113頁。
 - 46) 前掲13), 168-169頁。
 - 47) 前掲7), p.35. Joseph Banks (1743-1820)。クックの太平洋航海に同船して名をあげた探検家。イギリスのキュー植物園を核とした大英帝国の希少植物の収集ネットワーク形成に力を注ぐ。王立協会のフェロー。バンクスに関しては以下の文献も参照のこと。野間晴雄「海外からの植物移送・保存技術に関わる史料(翻刻)—大英帝国プラントハンターの元締めによる手引番—」, 関西大学東西学術研究所紀要第42輯, 2009年, 51-60頁。
 - 48) F. P. Robinson. *The Trade of the East India Company*, Cambridge University Press, 1912, p.127.
 - 49) 前掲31), 123頁。
 - 50) Horald H. Mann. *The Early History of the Tea Industry in North-East India*, *Bengal Economic Journal*, 1918, p.5.
 - 51) *Tea Cultivation in India*. *Calcutta Review* Vol. 40, 1865, pp.296-297.
ベンティングはパッテル(M.J.Pattle), グラント(J.W.Grant), マングルズ(R.D.Mangles), コルヴィン(J.R.Colvin), テウレヴェルヤン(C.E.Trevelyan), ロビンソン(C.K.Robinson), ウィルキンソン(R.Wilkinson), コルクホーン(R.D.Colquhoun), ウォーリッチ(N. Wallich), ゴードン(C.J.Gordon), ラダカント・デブ(R.Radhakant.Deb)を吏員に任命した。
 - 52) 前掲13), 170頁。
 - 53) 前掲50), p.5.
 - 54) 前掲13), 173頁。
 - 55) 前掲50), p.8.
 - 56) 前掲50), pp.11-12.

- 57) 前掲51), p.297.
58) 前掲6), 47-48頁。
59) 前掲6), 49頁。
60) 前掲12), 178頁。
61) M. R. Chaudhuri. *The Tea Industry in India*, Oxford Book and Stationery Co., 1978, p.9.
62) 前掲41), 118頁。
63) 前掲13), 179-180頁。
64) 前掲6), 51頁。
65) 前掲6), 54頁。
66) 前掲50), p.19.
67) Sanat Kumar Bose. *Capital and Labour in the Indian Tea Industry*, All India Trade Union Congress, 1954, p.5.
68) 前掲6), 63-70頁。
69) 前掲6), 72-73頁。
70) 前掲6), 72-83頁。
71) 前掲6), 87頁。
72) 山下幸一・雨宮智子『東ヒマラヤ山麓を訪ねて』朱鷺書房, 2004年, 151-152頁。
73) ダージリンについては別稿で論じる予定である。
74) Our Tea Garden in Assam and Cachar, *Calcutta Review*, Vol. 35, Sep., 1865, p.39.
75) M.R. Chaudhuri. *The Tea Industry in India*, Oxford Book and Stationery Co., 1978, p.12.
76) 前掲74), p.48.